

## レイモン・アロンとフランス社会学

### はじめに

レイモン・アロンは一九八三年秋の日、パリで友人がナチスに協力したという不当な告訴に関する弁護の証言をするためにおもむいた裁判所の階段で心臓発作のため死亡した。彼の友人、アメリカの元国務長官、国際ジャーナリストのヘンリー・キッシンジャーはこの報道に接して、アロンをジャン・ピエール・サルトルと並ぶ現代の行動する大知識人らしい最後として、哀悼のメッセージをアロンの遺稿でもある大作「回想録」(Mémoire)の序文によせている<sup>(1)</sup>。

一九七〇年代まで、アロンは反共・反ソの反動的保守主義者のレッテルを貼られ、エコール・ノルマル・シュペリユールの学友であり、長年の論争相手であった容共の実存主義者サルトルと比較されて不当に低い評価が与えられていた。「アロンとともに正しいより、サルトルとともに間違っているほうがよい」とパリのひとびとにいわれた。だが、八〇年代、彼への評価は大幅に転回して、フランスでもっとも尊敬される思想家としての栄光の季節を迎えることになった。八十年代の彼の書物はベスト・セラーズになり、知識人の購読する「マガジリヌ・リテレル」誌もアロン特集を出した。西成良成は当時のフランスの事情を次のように伝えている。

いささか俗な表現が許されるなら、アロンがこのように「死に花を咲かせる」ことができたのはなぜか。「反共」アロンが依然として——いや、かつてなく——反共、反社会主義であったことに変わりはない。変わったのはフランス、フランスの知識人たちのほうだ。長いための後、彼らの大部分はやっと、反ソヴィエト、反共産主義者を何ら恥ずべきでないのみか、フランス人がフランス人、ヨーロッパ人であり続けるために不可欠の、自明な選択であると認めることになった。<sup>(2)</sup>

アロンの死去を伝えるにあたって、思想家、政治評論家、国際ジャーナリスト、哲学者、歴史学者、社会学者の呼称がマス・コミにより使われている。たしかに、彼は第二次大戦中、ドゴール將軍の呼びかけにこたえ、「自由フランス」紙の主筆としてレジスタンス(抵抗運動)に挺身し、戦後はサルトルと「現代」誌を創刊、「コンバ」誌に、そして「フィガロ」誌の論説委員長として健筆をふるい、また後に、サルトルとの火花の散る激しいフランスの政治路線をめぐるイデオロギー論争を展開するなど、マス・コミの喝采を浴び、日本の知識人にも関心をひきおこしたが、これと比べると、社会学者としての評価は、とくに日本では高いといえないし、無視されているのが実情である。だが、彼は若い日、まず社会学者として学問的生涯をはじめ、戦後、パリ大学の人文学部社会学教授、一九七〇年以降、コレージュ・ド・フランスで「近代文明の社会学」の教授、そのほかイギリス、ア

鈴木 真一

アメリカなどの大学で教壇にたつなど、アカデミックな世界でも活躍し、フランス社会学の歴史的系譜につながりながらも、なおかつ、「明晰さ」「冷めた知性」「平衡感覚」のすぐれた知的素質によって独自の社会学理論を展開している。

フランスのもっとも古く、また権威のある社会学年報 (*L'Année Sociologique*) の一九八三年度版ではその冒頭にアロンへの追悼の辞を次のようにかかげている。<sup>(3)</sup>

一九八三年十月十七日、レイモン・アロンはわれわれのもとを去っていった。彼は現代フランスのもっとも偉大な知識人のひとりであり、また、同時代の主要なフランス社会学者のひとりであった。

アロンの社会学への影響は、彼の見解が数多くの障害と抵抗により傷つけられるほど、かえって強化されたのである。彼は多くの社会学の伝統を強調し、フランス社会学にマックス・ウェーバーをよみがえらせ、また、「歴史の批判哲学」 (*Philosophie Critique de l'Histoire*) のなかで、第一次戦前後にフランスで高い評価をうけながら、その後、半ば忘れかけたジョージ・ジムメルに多くのページを割いている。アロンはとくにデュルケイム派とウェーバー派との対立を明確に見きわめ、折衷主義のわなにはまりこむことを避けて、意図的にパーソンズの「社会行為の構造」 (*Structure of Social Action*) に比較できるような総合の作業をあえて試みなかった。おそらく、この学派間の和解が困難と判断したのであろうが、批判的なバランス・シートを問いかける趣味をもたなかったのである。彼の名著、「社会学的思考の諸段階」 (*Les Étapes de la Pensée Sociologique*) のなかで、社会学の歴史を諸段階の継起として促えている。だが、この著作のタイトルにもかかわらず、諸段階は社会学史にみられる進歩の観念に賛意を表して、それぞれの段階を明確に切断しなかった。これは彼の謙虚さからか、それとも懐疑主義からであらうか。だが、アロンは社会学史の定説に背いて、慎重に社会学者の人選を次のように行っている。モンテスキューを、また、アロンの保守的立場にもかかわらず、マルクスをとりあげ、そしてウェーバーを重視し、さらに彼をふくめたフランスの社会学者が長い間、忘れていたトックヴィルをそれぞれの段

階の代表的な社会学者と見たてている。

アロンは物理学がニュートンからはじまり、やがて結実すると見做されているように、社会学史学者として、デュルケイムをふくめて、社会学はコント、あるいはル・ブレイをもつてはじまるとする定着した神話を、またこれへの反論をタブーとする傾向を紛砕することに、ちゅうちょしなかった。彼は社会現象の学問的発見をいつにするかを特定したり、また、社会学の範囲とか、歴史学、経済学、哲学との境界を明確に線引きされとは信じていなかった。

また、レイモン・アロンはむろん、社会学史学者にとどまらず、イデオロギーに関わる社会学者であった。彼はイデオロギーの現象を、パレートが試みたような独自の体系理論を性急につくりあげようとはしなかった。この分野での彼の作業は結果としてはほかの目標にもつながっていった。後期の著作の多くは、世論、とくに知識人について、社会主義と国家社会主義者、資本主義と国家資本主義者の現実、その成長、そしてその原因と結果が現実と矛盾して現われ、あるいは、あらゆるばあいにも現実と関わることによって、イデオロギー自体が現実から遊離して強烈に出現することを訴えている。このテーマに関する好評な著作として、「知識人の阿片」 (*L'Opium des Intellectuels*)、<sup>「進歩への幻想」</sup> (*Les Désillusions du Progrès*)、<sup>「産業社会の十八講」</sup> (*Dix-Huit Leçons sur la société*)、<sup>「階級闘争」</sup> (*La Lutte de Classes*)、<sup>「民主主義と全体主義」</sup> (*Démocratie et Totalitarisme*) があげられる。

そして、彼の社会学の第三部門は「歴史哲学序説」 (*Introduction à la Philosophie de l'Histoire*) から、暴力、戦争、国際関係の問題の考察に到るまでの考察であり、これに関わる主要な著作は「国家間の平和と戦争」 (*Paix et Guerre entre les Nations*) と「クラウゼヴィッツに関する二部作」 (*Les Deux Volumes sur Clausewitz*) があげられる。

この年報はレイモン・アロンの死去に接したとき、すでに印刷中であったが、彼への短かいが、最大の賞賛の追悼文をおくることを望んだ。年報はアロンの著作、とくに社会学関係の著作に関する総括の論文を近く掲載することを予定している。

レイモン・ブードン (Raymond Boudon)



ここで予告された論文の執筆は一九八六年度版の「年報」でジョヴァンニ・ブッシーノによってはたされている。彼はアロンとの親交があり、バレートの研究者として知られ、その学殖はアロンにより高く評価されている。<sup>(4)</sup>

現在、アロンの思想的立場や近代・現代社会への——とくにきわめて現在の課題として、脱イデオロギー、産業社会、知的エリート——視点についての評価は確定しておらず、また、巨匠の社会学者たちの見解——それは学説にあり勝ちな、権威により強化された固定観念になっている——へのアロンの切れ味のよい知的挑戦に対し、その決断と賞賛と同時にその誤まりと独断が指摘されていることについて、正しい全体的評価を獲得するために、今後、積極的に検討することを私の課題としたい。

### (一) 社会学的思考の流れ

レイモン・アロンの社会学への関心は知的生涯の初期にはじまっているが、それはデュルケイム学派のひとりであり、「デュルケイムから自立した門下生」と自称するC・ブーグレの知遇によるものといわれる。社会学者としてのキャリアは社会学関係の多くの書評と「フランスの社会科学 (Les Sciences Sociales en France) の編集のうちに見出される。<sup>(5)</sup>その後、ドイツに赴きケルンやベルリンで研究と講義を行い、そこで新しく抬頭してきたドイツ社会学に深く接触した。

その成果は一九三五年、アロンのはじめの著作「現代ドイツ社会学 (La Sociologie Allemande Contemporaine)」を刊行している。<sup>(6)</sup>この書物はフランスの社会学者としてはじめての、しかもドイツの社会学史の独自の名著と評価され、すでに社会学の権威者となっていたカール・マンハイムの申し出により一九五三年にはドイツ語訳、一九六四年には英語訳が公刊されている。

アロンは美事な筆致で、まず、ドイツ社会学が百科全書的 sociology がもつような社会科学の帝王科学といった野望をもたず、より慎重に深

く、社会科学の間に位置する一つの学問として位置づけ、「人類はどこからきて、どこへ行くか」という進歩の観念に基く人類史の意味と課題を処理するといった高貴な使命を返上してしまつたとする。

彼によると、ドイツ社会学(分析的 sociology)は体系的 sociology と歴史 sociology の二つの部門に分けられるという。体系的 sociology では、まず、ジンメル、ヴィーゼの心的相互作用に社会分析の焦点を求める形式 sociology にはじまり、個人相互の人間関係と、経験的・心理学的方法を克服して「本質還元」による社会形象、とくに社会結合の本性・特性を洞察するフィアカントの現象学的 sociology を経過して、個人への全体の優位を主張するシュパンの普遍主義的 sociology におよぶ。同時にテンニースとシュマレーンバッハによる人間の共同生活の基本形態であるゲマインシャフト、ゲゼルシャフト、さらにブントの研究がここにふくまれる。歴史的 sociology ではオッペンハイマーが社会・経済史の発展を組みあわせ、アルフレッド・ウェーバーの文化 sociology では文明の確実な進歩と文化過程の不規則な動態とを区分する。カール・マンハイムの知識 sociology は経済的・社会的下部構造とイデオロギー的上部構造との関係を究明するが、ここにオッペンハイマーにより区別されなかつた発展過程とアルフレッド・ウェーバーにおいて分離された変動過程が確実な方式で社会学史で関連していることに注目している。

むしろ、二つの社会学部門の間には対立もあり、交錯もある。アロンによると、体系的 sociology は概念的範疇と歴史的全体の把握に必要な「理念型」をうみだし、歴史的 sociology は個性的な歴史生成の動向を洞察することにあるが、両者相互の関連を促したのは本書の多くの部分を費して紹介されているマックス・ウェーバーの偉大な労作であるとする。

じゅうらい、他国の社会学史を検討するばあいには主観的・恣意的な評価が潜在的にまぎれこむといわれるが、アロンは多くの文献に対して、特有关心した判断と理解力により、この種のわなにはまりこむ危険をさけることができた。ここで、うかがえることは、彼がドイツ



留学中、新カント主義の価値判断論や、文化科学の方法論を、さらに歴史哲学を撰取することによって、ドイツの社会科学の本質をみきわめたことであった。つまり、体系的社会学では、いささか非重点的ではあったが、ドイツ社会学の代表的な見解をたくみに整理し、歴史的社会学では、もろもろの観点を弁証法的に処理し、両者に対して、マックス・ウェーバーにより、すぐれた総括が行われたとする着想にもとづいている。

このような彼の視点からすれば、マックス・ウェーバーの「理解社会学のカテゴリー」で展開されている個人の行為を基礎におく社会組織の構成は体系的社会学に該当する。経済と社会に関する多くの研究は歴史的社会学に関連している。法社会学、経済社会学、宗教社会学は体系的社会学と同時に歴史的社会学の分野にも関連する特殊社会学でもある。アロンは二十世紀前半のドイツ社会学の二つの流れ、体系的社会学と歴史的社会学の並列ではなく、美事な綜合を明晰、緻密でかつ客観的な分析によってウェーバーに見出そうと試み、また成功している。アロンのこの処女作について、後に交友関係に入ったアメリカの社会学者、エドワード・シルズは語っている。

私自身、アロンがこの書物でとりあげている社会学者たちの研究について多くの時間を割いていたが、私の判断は彼が到達した結論とほとんど一致した。ごく少数の研究者しか、いかにウェーバーの業績が偉大であるかを知らなかった当時に、異国人の彼が与えた決定的評価はわれわれをへだてる四〇〇〇マイル以上離れた遠距離にいるアロンに対し、心からの親近感を覚えた。

シルズが指摘しているようにフランスのひとりの若き俊英が一九三〇年代の中ごろ、フランスではドイツ社会学の知識が皆無であり、またドイツでも現在かかえている名声が何一つなかった当時に、すでに死者であったマックス・ウェーバーを高く賞賛していることは彼のすぐれた知的洞察力を物語っている。

ここで、アロンによるフーアカントの現象学的社会学への見解に若干ふれてみる。「本質型」にしろ、「究極的事実」にしろ、「直観的にとらえられた全体」にしても、これらを不明瞭なものを多くふくんでいる。たとえば、全体について現象学的直観は、それを分析する余地はあっても、ひとつかみにこれを把握する役には立たない。フーアカントは集合的現象を要素と全体とのあいだの絶えざる往復によって分析している。現象学がここでは、集団に固有の現実を確認する役にはたつが、この現実是不明確なままである。「集合的因果性」、「作用連関」はあいまいな表現にとどまり、ついには自然主義的な性格と精神の創造的性格といった公式にまで行きつき、そこにあるのは心理学的公式と全体論公式との間の動揺である。こうして、アロンは積極的な批判というよりは困難な論点をあげ、現象学的社会学とフーアカントの構想から着想を得た心理学を利用するフーアカントの立場と社会学の隔たりを指摘する。

アロンがベルリンのフランス学院で歴史の論文を準備しながら、フッサールの研究をしていた当時、パリに戻ってモンパルナスのカフェのテラスでサルトルに現象学のことを知らせたことがある。その時、サルトルが自分の必要、願望に応える一つの方法の啓示にどれほど動揺したかを同席していたシモーヌ・ド・ボーボワールの話しはよく知っている。二人はその店のカクテルを注文した。

アロンは自分のコップを指さして「君が現象学者だったらこのカクテルについて語れるのだ。そしてそれが哲学なのだ」……それは彼が長い間、望んでいたこととびつたりしていた。つまり、事物について語ることに、彼が触れるままの事物を……そしてそれが哲学であることを彼が望んでいたのである。アロンは現象学がサルトルが始終、考えている問題に正確に答えるものだといつてサルトルを説きふせた。つまり、それは彼の観念論とレアリズムとの対立を超越すること、それから意識の絶対性とわれわれに示されるままの世界の現実とを両方同時に肯定するという彼の関心をみたすのだとアロンは説得したのであった。



だが、アロンは現象学も、「存在と時間」も単なる語らい、よくて一つのアプローチ以上のものをサルトルにもたらしただけでないという。これは同時にアロン自身の現象学への姿勢でもあった。

その後、現象学のフランス社会学への導入がギュルヴィッチの初期の研究によって部分的に導入され、やがて社会的現実を深さの諸層について考察する「深さの社会学」(Sociologie en Profondeur)をうんだ。「社会学は既成の結晶化された社会構造だけでなく、いまや生成・展開過程にあり、沸騰状態にある社会構造に深く分けいって分析することは明白である」とする「深さの社会学」の方法論と還元的方法を用いて、直接に可視的、可感的に与えられているものから本質にせまる現象学のアプローチとの連がりは親近性以上のものがある<sup>(66)</sup>。

だが、ギュルヴィッチの名著、「社会学の現代的課題」(La Vocation Actuelle de la Sociologie)において、実証的科学としての社会学は「現象学的還元」の方法に援助を求めることを断念し、経験的アプローチに徹底すべきことを明言しており、彼自身も現象学者とよばれることを喜ばなかったといわれる。それにしても、実証主義、楽天的な進歩論から弁証法的超経験主義への視点に転じたバランティエとジャン・デュヴィニョーの方法論は、せまい実証主義と因果的考察に制約されたフランス社会学に一つの新しい活路を与えたことはほぼ間違いないし、この視点の転換の手掛りを与えたのもアロンによるものとみてよいのではないか。

アロンの社会学の展開はソルボンヌ大学の教授として講義を続けた時期と一致し、この講義のなかで、生涯にわたる主要な研究領域となつた社会学的思考の歴史、産業社会、政治制度と社会階級、イデオロギー、エリートなどをとりあげている。この講義のすべてがソルボンヌで文書にしてコピーされ、後に刊行されている。また、アロンはこの時期「ヨーロッパ社会学雑誌」(Archives Européennes de Sociologie)を発行し、終生、代表のひとりとして活躍し、ここでも多くの論文を執筆している。

さらに近代社会の具体的問題についての関心は、第二次大戦中、「自由フランス」に連載した論評のなかに見出されるが、そのうち、とくに一九四〇年代の中期に単行本として再版された「帝国主義の時代とフランスの未来」(L'Age des Empires et L'Avenir de la France)は当時、彼の著作のなかでも、もっとも注目された一つになっている<sup>(67)</sup>。また、この時期、エリートの形成に関する多くの論評が集大成され、理論化され、それが一九四八年、ロンドン大学ではじめて集中講義が行われ、それが「社会構造と支配階級」(Social Structure and Ruling Class)の論文となって結実し、高度の学術書として評価された<sup>(68)</sup>。

アロンはソルボンヌでも注目された社会学史に関する講義を素地にして、名著のひとつ、「社会学的思考の流れ」(Main Currents in Sociological Thought)が出版された<sup>(69)</sup>。この書物では、モンテスキュー、コント、マルクス、トックヴィル、デュルケイム、パレート、マックス・ウェーバーがとりあげられ、彼らが西欧社会がかえこんだ同じ課題がまったく異った視点から分析され、そこでの思考の流れを鮮やかに解明している。

社会学史としてのこの書物で、多くの話題を呼んだのは、前に引用した社会学年報が指摘しているように、従来の学史の定説にそぐわない社会学者の人選が行われていることである。ここではこの人選の当否ではなく、アロンの社会学観を理解する手掛りの一部にふれてみたい。従来の社会学史ではアロンのようにモンテスキューやトックヴィルを社会学の中心的人物にしたことはまずない。アロンによると、モンテスキューはコント以上に社会学者であり、「法の精神」にあらわれている社会についての方法論はコントの社会への分析よりはるかに現代的である。これはモンテスキューがコントよりすぐれていることをかならずしも意味していない。そうではなく、アロンはモンテスキューを社会学の先駆者のひとりと考えたのではなく、むしろ社会学の偉大な理論家と考える。彼にとって、歴史の真理とはもろもろ



の道徳、慣習、法律、制度の無限な多様な形態をとり、この一貫性のない混とんとした多様性に理論的な秩序を与えることである。この手法はまさしくウェーバーのそれである。では、この知的秩序をどのようにに索出するのか。第一に世界を支配するのは偶然ではなく、その底には一見、不条理にみえる事象を説明する諸原理が横たわっている。ただ、偶然的すべての現象が根底にある要因によって必然的に生じたとはしない。第二に外観上の偶然と、普遍的に妥当する社会体系との中間的段階を形成するものとして社会組織の幾つかのタイプがあり、これが社会の普遍的な法体系と並んで、かみあつて偶然的な現実を規制する。アロンはモンテスキューのこの姿勢がまさしく社会学者に特有なものであり、法社会学のフランス学派とよばれるものの創始者にふさわしいという。

トックヴィルはアロンによるとフランス社会学では無視されているが、それはデュルケイム学派がコントに負うところ多く、政治制度を黙殺し、もっぱら社会構造に目を奪われてきたからである。アロンは社会学者の理論体系とかかわる基本的なポイントはいかなる歴史的・社会的診断を行うかにあるという。産業そのものを肯定したコントと、また、資本主義経済の未来について黙示的、かつ破局的な見通しをもったマルクスと対照的に、トックヴィルの特性は「アメリカの民主主義」において、アメリカ資本主義社会の観察や、二月革命の経験に基づき、民主制の分析を行い、平等主義の発達がえって、個人の自律性を奪い、専制を招く危険があることを力説している。アロンはこのトックヴィルの見解が現在の大衆デモクラシーや大衆社会の問題への鋭い予見をふくんでいると評価する。アロンもトックヴィルの思想的分脈にそって、「回想録」のなかで「諸価値の恣意性や、どちらかといえどより専制約ではない集団内における個人間の不平等性を強調するあまり、人は結局このような明白な事実を認めないようになってしまふのだ。つまり、近代社会が再生産されるとしても——再生産されないなら、それはもはや社会たりえないだろう——、過去のあらゆる

る社会よりも急速に変貌するということである」<sup>(14)</sup>という。それにしても、社会学者に関するユニーク、かつ新鮮な人選が行われたのはどのような規準からであろうか。アロンは社会学の概念規定を次のように示している。<sup>(15)</sup>社会学の主要な課題は、①社会的なものをそれ自体として定義し、分析する。②それぞれの社会構造とそこでの固有の特徴を探る。③これらの社会構造を歴史の流れのなかに位置づけることにある。

この三つの課題をデュルケイムに求めてみる。デュルケイムは社会事実を個人現象をこえるものとみて、その特有性を社会学の対象とする。そして、彼がホルドとよぶ、もつとも単純な社会からはじめて、単純多環節社会、さらに複雑多環節社会にとすすむ。そこで、彼はそれぞれの社会の構造を規定して、それぞれの異なった構造を一つの歴史的連続のなかで関連づけようとする。

次にマックス・ウェーバーに例をとる。彼はまず、個人の間関係からはじめて、全体社会を構成しようとする。次に、経済的、政治的、法的構造の主要なタイプまで規定できるような経済的、政治的、法的カテゴリーを構想する。そして、おわりにこれらの構造の多様性を歴史的発展という連続のプロセスのなかに位置づけようとする。要するにアロンの方法論はバレット、モンテスキュー、トックヴィルの洞察と分析をとりいれ、デュルケイム、ウェーバー、マルクスの全体社会への認識とを彼なりの方式で総合したものである。

こうしたアロン自身の社会学の概念に基いて、これに接合し、あるいは接近し、さらに深く関わると判定する社会学者たちの見解を社会学的思考の流れに引きこもうとする作業がこの独自の社会学説史をつくりだした。

この著作では、アメリカの社会学者があげられていないが、アロンは後日、執筆することを予告した。ただ、終章でアメリカ社会学をふくめた世界の社会学の動向を暗示的に分析している。アロンはバレット、デュルケイム、ウェーバーが社会的行為の構造に関する一般的理



論に寄与したとし、その上での総合理論を展開したパーソンスの見解を評価する。だが、現在の社会学の動向として、人間行動の徹底的研究、現代社会の解明、歴史の発展に関するトータルなヴィジョン、これらを同時に包括する総合的な社会学の偉大な学説(Grandes Doctrines)が出現していない。いま、もしあたって求められるのは社会的行為の理論体系であり、そこでの有効な基礎的諸概念の発見である。だが、異った広い領域で精密に細分化された調査研究がエネルギーに注ぎ込まれているのが現状である。現代社会の全体的な解明については社会学者は今日の科学の可能性をこえるものとしてこれを拒否する。それにしても、社会学が理論体系をもたずに、大規模な個別調査や、精密な事実認識のままで示される事態を科学的成長をしめすものといふてよいのであろうかとアロンは訴える。

## (二) 自由主義者の証言

アロンの社会学の焦点は、近代産業社会における自由と理性の概念に基くリベラルな民主主義の特性、変容、発達への全体的関心から生じている。このテーマへの彼のアプローチは二十世紀の西欧デモクラシー、それもとくにフランスの民主制での体験に根ざしている。この体験の最たるものは二つの全体主義——一九三〇年代の凶暴なナチズムという右翼との、とくに、同じ三〇年代にはじまり、とくに第二次戦後の強力、かつ侵透した左翼——への民主主義勢力からする対決であった。

自由な民主制のありかたが高度産業化社会の動向と競合するに到るのは第二次戦後であった。また、この時期、民主主義制への再構成の要請は、ことにフランスにおいて緊急な課題であり、そこでのアロンの体験と、そこから生じた問題提起とが彼の社会学の焦点となったのは自然の成りゆきであった。アイゼンシュタットはアロンのすべての研究、それが政治体制であれ、階級であれ、全体社会にしる、構造的・制度的複合体を視野におく、社会学の創始者であるウェーバー、

マルクス、デュルケイムの理論体系と、パレート、モンテスキュー、トクヴィルの構想とを彼なりの方式で統合することにあつたとして次のように説明する<sup>(16)</sup>。

アロンはパレートの影響を受けて、エリート、とくに知識人の動向に関心をもちた。この研究にさいして、全体社会の制度面、構造面から始めて分析していること自体、独自のものであり、エリートの分析をモンテスキュー、トクヴィル、そしてさらにマキアベリ、ギッシャルディーニなどルネサンスの共和政体主義にまでさかのぼって根づいている伝統的思考に結びつけている。この思考方法は制度と組織の諸類型と個人の素質と態度——美德、分別、どん欲、恐怖——との関係を重視する。この手法は啓蒙思潮、とくにフランスとスコットランドにみられる社会分析は現代の社会学にはほとんど見失われたものである。したがって、レイモン・アロンの独自の業績はこの手法を社会学の主流に復帰させ、エリートだけでなく、階級形成、政治制度の分析に使用し、さらに社会学の多くの主要な研究に、そして現代世界の理解にも適用したことであった。

アイゼンシュタットが指摘したようにアロンの知的志向は啓蒙思想にあつたといふてよい。アロンは啓蒙思想の申し子として、理性、自由の展開、進歩の可能性を近代社会の理法の核心を見すえた。だが、彼にとつて自由と理性は抽象的な概念、もしくは彼が嫌悪した全体主義的ドグマとイデオロギーではなく、具体的、かつ実的な法乙と制度のなかに深く根づいている古き共和主義的美徳を象徴するものであった。彼はむしろ、近代産業社会全般の進展から派生し、また、それに伴う第三世界のかかえる諸問題が多くの不安、とくに進歩の観念への幻滅をひきおこしている事態を冷静に観察し、これについて「近代社会の弁証法」のサブ・タイトルをつけた「進歩と幻滅」(Progress and Disillusion)において、鋭利な分析を行っている<sup>(17)</sup>。アロンはこの幻滅の多くが近代の開かれた社会から生ずる固有なものとするが、それでも、この幻滅を消失させ、克服できるとする全体主義的エリート



ピアン・イデオロギーの視点をかたくなに拒絶する。

事実、アロンはこの種のイデオロギーを政治不安の元凶、自由な民主主義制への最大の危機と受けとめ、彼はこれを「知識人の阿片」

(L'opium des Intellectuels)、「精神の墮落、真実の理性、そして自由への抑圧であり、このようなものとして制度とその営みにあらわれている自由と理性のプラグマチックな精神への最大の潜在的脅威と見做している。彼はシモース・ウェイルの次の言葉を引用する。「マルクス主義は疑いなく、言葉のもっとも低い意味で一つの宗教である。宗教生活のあらゆる低劣な形のように、それはマルクス自身の適切な言葉をかりれば、民衆の阿片として引きつづき使われている。」

パレートはヨーロッパ社会が過剰な結合の本能と経済的打算に基づく保守的性向をもつ「キツネの種族」に属する金権的政治エリートによって支配されてきたが新しく抬頭してきた力の行使にはるかにすぐれ、策略を用いずに合法性を变革しようとする強力なエリートに注目する。彼によればファシストとコミュニスト・エリートは疑いなく退廃的な社会において権力を掌握する「ライオンの種族」に属するエリートを表すものとする。だが同時に国家は経済活動に介入し、企業を国有化し、所得を再分配し、徐々に個人の創造性と経済的活動に介入し、経済競争を抑制する官僚制を強化しつつある事態を凝視する。この暴力的なエリートの支配と国家管理経済の支配とを予知するパレートの洞察力をアロンが評価する。

アロンはパレートの後をうけて社会学者として新しい知的エリート「知識人」(Intellectuels)の出現に注目する。代表作「知識人の阿片」(L'Opium des Intellectuels)のなかで彼はいう。

民主主義のもつ欠陥に対してはきびしいが、真正なドグマにそうものとして最悪の犯行については沈黙を守るインテリの姿勢を観察するばあい、私はただちに『左翼』『革命』『プロレタリアート』という神聖な言葉を想起する。こうした神話を分析することは歴史を検証し、しかも社会学者が

まだ手をつけていない一つの社会的カテゴリーである『知識人』<sup>(18)</sup>というものを検討する必要を私に与えた。

アロンのいう知的、かつ左翼のエリートに対する社会学的考察は高度産業化社会でコミュニズムがもてはやされるのは何故か、労働者人口の少ない社会でプロレタリアートの政党とマルクス主義が優位を示しているのはどうしてか、そのほか様々の社会でインテリの言論、思考、行動様式がどういう社会環境に規制され、支配されているのかに向けられる。

左翼知識人のもつユートピアン・イデオロギーとは対照的にアロンは啓蒙思想の、そしてモンテスキューとスコットランドのモラリストの伝統をうけついで自由へのヨリ現実的、実用的志向を重視する。ここで興味があることには彼がマルクス主義の図式に接近すると同時に、これへの反論を試みる。つまり、実践的課題に理論的分析を対応させることへの彼自身の意向に基いて、マルクス主義の図式に接近するが、マルキストのヴィジョンが内蔵する全体主義的ユートピアをかたくなに拒絶する。彼は後にこのアプローチを「ヨーロッパのデカダンスの弁明」(Plaidoyer pour l'Europe Decadente)のなかで表明したが、そこでは民主制における反カリスマ的な現実、スローペース、漸進的な改良主義が苦役制、灰色の現実、全体主義的、権威主義的制度の大きいユートピアン宣言とあざやかに、かつ俊烈に対照されている。<sup>(19)</sup>

一九五〇年代、フランスのジャーナリズムを大きくにぎわし、直接にはマルクス主義革命の妥当性、そして、東西の冷戦とコミュニズム、スターリズムをめぐる容共派実存主義者サルトルと保守的自由主義者アロンの論争が「現代」(Le Temps Modernes)誌上その他で行われ、フランス知識人に過剰な反応を惹きおこした。だが、この論争はエコール・ノルマル・シュペリユールの学業が終了した二人がともに二五歳のとき、サン・ジェルマン大通りで交わされた会話にすでにみ



られる。アロンは「回想録」のなかで、なつかしげに語っている。

革命において……虐げられた者たちというか虐げられた者たちの代表と称する者たちは、彼らが権力から追い払った者たちの役割を進んで借り受けることになる。……そうかもしれないとサルトルは答えて言った。革命のあとと同じ不正、あるいはよく似た不正が定着するかもしれない、しかし、たとえそんなことにならねばならないのだとしても、ぼくは小学校の教師になって革命の役に立ちたいと思う。……彼は私に訊ねた。もし君が革命を信ぜず、さまざまな卑劣な行為のあることを知らぬでもないこの社会に同意するというなら、いったいなぜなのだ。……おそらく私の心のなかには、アランが好んで引用していた一つの文句が深く刻みこまれていたのである。文明とはわずかな薄皮のようなものだ。ちょっと衝撃を与えるだけで引き裂かれる。そして、その裂け目から、野蛮が立ち現われる。革命は戦争と同じく、何世紀ものあいだにわたってゆっくりと形成された文明という薄皮を、引き裂きかねないものだ。<sup>(20)</sup>

だが、自由な民主主義体制に対して、アロンは楽天的な、イージーな期待をいだいているわけではない。「知識人の阿片」の終章で次のように語っている。

革命と経済計画のいずれからもう奇蹟的な変革は期待しなくなった人が、条理のたたないことに屈しなければならぬというわけではない。……事態はおそらく違ったものとなる。おそらく知識人はその限界を見出すと同時に、政治的に関心をもたなくなるだろう。われわれは、この余り確かではない見通しを喜んで受け入れようではないか。無関心なら、われわれに害を与えることはない。不幸にも人類は、いまだにおたがいに殺し合う機会とか動機を、一切もたなくなる境地にまでは、達していない。もし寛容が懐疑から生れるものであるとすれば、われわれは誰に對しても、一切の理想とかユートピアを疑い、すべての救済の予言者とか終末観の使徒たちに挑戦するように教えようではないか。もし彼らに狂信をすて去ることが出来さえすれば、われわれは懐疑主義者の到来のために祈るうでは

ないか<sup>(21)</sup>

ここには救い難いベシミズムに時おりおちいりながらも、微光を求めて、自由な従って不確かな未来を維持すべき知的挑戦を放棄していないアロンの構えをみることができる。

アロンのフランス社会学への独自の貢献とともに、とうぜんのことだが、知力の限界と盲点を彼ももっているが、その最大のものは冷めた合理主義者でもあったことにより、人間生活の原初の、そして神話といった感性の世界に暗く、冷淡でもあった。たとえば、一九六九年から七〇年にかけての学生叛乱をふくむ五月運動の激情についても無理解であり、民族問題の分析にも関心が少かったといわれる。この五月運動に對し、アロンはゆたかな社会でのアンニエーが与えた予期しない革命で演じられたフランスの集合的心理劇であり、感性の地表への突発的噴出とみるにすぎない。<sup>(22)</sup> また、アロンのもつ自由主義の信念は、五〇年間にわたる反ファシズム、反コミュニズムだけでなく、まとまった著作という体裁こそとらなかったが、インドシナ、アルジェリアなどの民族問題をめぐる反植民地主義に對し、一時的な情熱を抑制し、善意な平衡感覚をもって対処していたことも事実である。

### (三) 産業社会論と脱イデオロギー

アロンの産業社会論を理解する手掛りは、論文「産業社会と社会階層」(Industrial Society and Social Stratification)と前掲の「産業社会の十八講」(Dix-Huit Leçons sur La Société Sociologique)に求められる。この二つはアロンのほかの社会学関係の著作と同じく、ソルボンヌの講義録を素地にして公刊された。彼によると、現代世界にとって問題なのはいかなる社会体制を選択するかにあるのではなく、社会体制をこえていかにして産業化を達成するかにあるというのであった。

産業社会の概念は現代のどんな学者もさしおいて、まずあげられる



のは産業社会論の父、アロンだとダニエル・ベルはいう。<sup>(23)</sup> 社会の経済的・下部構造というマルクスの考えでは、生産様式が生産の社会関係（財産）と生産技術（機械）の二つにわけられており、資本主義の発展では社会関係が中核となって高度に両極化した階級闘争をうむとマルクスは主張する。だが、現実にはそうした両極化は生ぜず、それに代わって技術と機械化の進行である。この動きを洞察して、アロンは産業社会論を展開する。「資本論」以後の一〇〇年間に西欧の産業社会では当時のユートピア思想家の誰もと考えなかったような爆発的な生産性の向上と技術の発展をうみだした。

生産力とその技術の躍進により、資本主義社会と社会主義社会との区別にとって代わるものとして、産業社会の概念を確実なものにした。官僚化も資本主義と社会主義を二つの異なったものではなく、同一タイプの変形とみなし、社会発展に関しても産業社会はこの二つの体制を共通のものとして包含する。アロンは前掲の「Dix-Huit Leçons sur La Société」のなかで、「私は主要な歴史概念として資本主義に代わって、産業社会（技術的、科学的ないしは合理的社会）という概念を選んだ。……この概念に関して、産業社会のいくつかの異なったタイプを区別し、成長モデルおよび成長段階という考えを導入した。」<sup>(24)</sup>

アロン自身をふくめて、産業社会論は産業化の歴史的経過を通して到達されるはずのひとつの抽象的な概念であり、限定であるという主張である。したがって、この議論は演繹的に構成された抽象的概念であり、その意味で現実の産業化に光りをあてて分析するための理念型として使われていることに留意する必要がある。

クラーク・カーにより産業社会論は後に精密にしたてられた産業社会の「収斂論」(Convergence Theory)に行きつくという、つまり、異った産業社会間に成長する制度・構造面の類似性を重視する試みとして、アロンの見解が注目される。この概念ははじめ生物学ではじめ、生物学で使用され、類似化を伴う生物進化は収斂化とよばれたが、やがて文化人類学に転用され、相互に無関係な異なる文化から類

似の文化が生ずるような進化のプロセスを重視する考え方を収斂理論という。さらに、社会科学全般にこの概念が弾力的に採用され、その代表的なものはアロンの産業社会論にみられるように産業化の進展につれて初期には相異した諸社会がやがて経済体制、政治体制などにも近似化するであろうとする仮説である。この収斂理論では社会主義革命も急速な産業化を達成する一つの選択しうるプロセスとされる。また、西欧近代化を唯一つの規準とするロストウなどの国際的規模での近代化論も収斂論をふくんでいる。

だが、アロンを単純な産業収斂論者と見たてるとは浅薄であり、危険でもある。収斂論は彼の産業社会論と同じく一種の理念型であって、現実の産業化の進行につれて、いろいろの相異したタイプがあり、単一ではなく、多元的な収斂現象が展開されるとして、同質的な産業収斂論には大きな疑問を表明している。<sup>(25)</sup>

産業社会における機械・技術の進展はとうぜん、その社会構造がテクノクラシーという形態をはらむ。ベルは産業社会がテクノクラートに支配されるという信念は、すでにサン・シモンの産業社会がテクノクラシーをヴィジョンと見たてているように、とくにフランスで強く根づいているとしてべは次のように指摘する。

フランスでは中央からの管理の伝統が長く——トクヴィルはそれがフランス革命でいちだんと強化されたという——、国家エリート集団が、その目的のためにつくられた大学校(Grandes Ecoles)——つまり高度の技術教育センターとして一七九三年に革命政府によってつくられた理工科大学校(Ecole Polytechnique)と、第二次大戦後の国立行政学院(Ecole Nationale d'Administration)から出現する。レイモン・アロンが指摘したように、オーギュスト・コントは理工科大学出の経営者の象徴的パトロンである。ジャン・メイノーをはじめ数々の学者は、真の権力は選ばれた代表者の手から技術専門家の手に移り、今や民主制でも官僚制でもなく、テクノクラシーという新しい型の政治が始まるといふ。<sup>(26)</sup>



近代の歴史的展開については二つの見解の対立もあり、交錯もあった。一つは資本主義と社会主義の対抗関係、そして資本主義から社会主義への転向を歴史の流れと促えるマルクス主義の歴史的図式であり、もう一つは前工業化から工業化の流れとするものである。この後者の流れの延長線上に脱工業社会理論、情報化社会論、そして産業社会のマイナス効果を主調とする地球システムの理論が現われてくる。アロンの産業社会論はコント、デュルケイムといったフランス社会学の歴史的系譜に連がる立場では、マルクス主義を産業社会の展開にもなつて生まれた理論であつて、それは包括的な巨大理論としては弱点だらけであり、体系理論ではなく、イデオロギーにすぎないともみる。アロンはマルクス主義の一元的視点ではなく、多くの視点を複眼的に促えるところに社会学の存在意義を認めようとする。彼はこの間の事情を次のように告げている。

われわれはこれら信者の群れの灰色の偉大さに感嘆することはできる。われわれは彼らの献身に、規律に、自己犠牲に感嘆することもできる。こうした彼らの戦士の美德は勝利を導く類いの美德である。だが、狂信者たちに、その不可避的な優越性を認めることができるようになるのは、われわれがいっさいの懐疑の念を失った上での話である。狂信的な唯一の階級、唯一の行動、および、唯一のイデオロギーを拒否して、真実の自由をめざすためには不断に懐疑の念をもち続けねばならない。<sup>(27)</sup>

一九五〇年代の後半、大衆社会論から産業社会論への移行において、もはやイデオロギーの時代は終わったという主張があらわれてきた。それまで人間生活を動機づけている価値観と社会の現実とのズレのきびしいあいほど、イデオロギーの生成の可能性を高いといわれた。だが、シルズによると、現在の西欧社会ではイデオロギーの潜在的な拘束力は失われたという。階級格差間の縮小、福祉国家政策の拡大、社会の諸分野の管理化の浸透、そして産業社会における改良主義の諸施策の向上により、高度産業化社会では「イデオロギーの終焉」

の時代を迎えたとされる。

しかし、ダニエル・ベルの主張をみても、イデオロギー終焉論の発想の根はもう少し深いし、具体的な歴史事例も働いている。彼によると、イデオロギーの終焉も本質的にはマルクス主義の終焉を意味するのであり、その要因となった歴史的根拠として、(一)一九三〇年代のモスコ裁判、(二)一九三九年の独ソ不可侵条約、(三)一九五六年のハンガリー事件などがあげられる。このマルクス主義の思想に背反する歴史的根拠の上に具体的な大衆運動への幻滅や、心理的外傷経験が加重されて、アロンをはじめとするイデオロギー終焉論がはばなく展開する。要するに、イデオロギー終焉論は①現代はイデオロギーの終焉の時代であり、さらにいえばマルクス主義の終焉であり、②先進産業社会では労資の対立は生産性の向上とともに弱まり、階級闘争の制度化が行われ、資本主義か社会主義かの体制ではなく、しだいに合意を前提にして個々の論点の対立にすぎなくなっている。③労働者の大部分は社会主義政党ではなく、しだいに合意を前提として個々の論点の対立にすぎなくなっている。労働者の大部分は社会主義政党ではなく、保守党を支持しており、中間階級化している。④イデオロギーとそれにもとづく政治の時代は終わりつつあり、マルクス主義に固執するソ連でも産業化がすすむとともに、やがては「イデオロギー時代の終焉」が現実化している。

アロンはイデオロギーの終焉にさいして次のような注意を与えることを忘れていない。

読者諸君、どうか誤りを犯さないでほしい。十年前、私はイデオロギー狂信主義と闘う必要があると考えた。明日はおそらく恐るべきことは無関心であることのように思われる。憎しみにかきたてられた狂信は恐ろしいことのように私には思える。それ以上に、自己満足した人間は私を身ぶるいさせる。<sup>(28)</sup>

たしかに、客観的にみると、イデオロギーの終焉論は社会科学の体



制内編入を意味するのではない。精密な科学主義に対する大衆の素朴な信仰に支えられ、社会科学の社会学を侵透させ、体制への協力という状況をつくりだし、結果からいえば、イデオロギッシュな作用を果しており、イデオロギーの終焉論は現実には知的テクノクラートのイデオロギーにはかならずなくなってしまうという田中義久の批判もある。

そこで、アロンは社会学の課題として、現在は単なるイデオロギー終焉の時代ではなく、人間性への、そして自由への信頼のなから、虚構のイデオロギー再生に対する橋頭堡を形成する現実の手だてを模索しなければならぬとする。アロンはシルズのために寄稿した「イデオロギーの固有な方法」(Proper Use of Ideologies)のなかで、「イデオロギーの終焉」に関する彼の見解を示して、「忠実な信者たち」をもつ全体主義的イデオロギーと真実の自由への懐疑的な追求の知的姿勢との相異を確認する<sup>(29)</sup>。そして、後者に関わる社会学的观点を次のように開示する。産業社会体制間の決定的な相異はそれぞれの抽象的理念ではない。むしろ、諸制度の現実とそれに伴う政治への姿勢に根づいている社会的・政治的行為の前提として、社会生活の自立性に基く政治活動、権力の集中、あるいは分散、そして自由への集中、あるいは分散の関わり合いのなかに横わっているとす。代議制に関するアロンの論文「社会学者と代議制」(Sociologist and Representative Institution)からの次の抜粋は彼の見解をもっとも明確に示している。

われわれは、はじめに社会学の創始者たちが近代社会については熱狂的ではあったが、代議制についてはそうではないと語った。彼らは自由と平等の理念を所有していたという意味では民主主義者であったが、代議制度が彼ら自身の目標への必要な手段とは見做さなかった。マルクスも、コントもこの観点を共有していたが、深層の部分では相異した構想を展開した。

コントは最終的にはアリストテレス派であり、彼にとって機能分化はあ

らゆる社会の崇高な原理であった。平等は個人の職分と素質との間で成長する調和が生じたばあいのみ生ずる。……

われわれはその後、何を学んだか。マルクス、コントに反論して、政治は人間存在の永遠の本性であり、あらゆる社会の永遠のエッセンスでもあることを認めた。この意味での政治が消滅するという想定を進めたり、それぞれの政治体制の特性を見定めることなしに、社会・経済構造によってのみ、どのような社会かを規定することは誤まっている。

コントを批判して、集団労働の合理的組織それ自体が政体の選択とか、権威が行使される方式を解決するのではないことを知った。ポール・ヴァレリーが宣言しているように、選挙は未知のことがらを国民にたずねる手段ではなく、国政に参与する媒介手段であり、権力と市民とのコミュニケーションと交流を維持し、また指導者をつくり出す方策である。選挙制度を通して、階級、政党、個人それぞれの間の対話が国家それ自体の営みとなる。

同じように、マルクスに対するわれわれの反論の理由は明白である。階級社会と階級なき社会との間の、対立する階級と対立のない階級との間のアンティテーゼは誤りである。つまり、そこでは生産手段の私有制の廃止、プロレタリアートを代表する政党に権力を委ねることによって、社会は諸政党の意図的な抗争に場を与えないような状況がくりだされるという。ここにマルクスの大いなる幻想が存在する。

あらゆる階級、組織集団が特定の社会秩序、政治体制、コミュニティの価値に密着して志向するばあい、階級闘争——それが絶対権力への闘争を意味する——が体制全体の変容を実現する限り、理論としては、この闘争は消滅するかもしれない。だが、予見可能な未来では、もろもろの利害が対立する諸集団がいぜんとしてそのまま残るだろうし、また、そこでの多くの理念も残留するであろう。したがって、統合され、同質的な社会のユートピアは代議制の消失を合法化することによって、現実には経済の徹底した管理化が一方的に行使されるような独裁制を促進することになる。社会学の創始者たちの代議制に示された軽視、あるいは無関心が結果的には、分裂なき、階級なき社会への彼らの空しい夢から生ずる。

産業社会が合理化すればするほど、そこでの夢があとかたなく消え去っ



てしまう。議会の冗ぜつな討論により生じた行政の渋滞も、生活水準が高  
いばあいには容認されることになる。開発途上国が現在、示しているよう  
なもどかしさは一世紀前の西欧の指導者たちのもどかしさを理解するのに  
役立っている。

わたしはヨーロッパ、北アメリカで採用されている形態での代議制が典  
型的、かつ普遍的な価値をもつことを要求していない。政治の幾つかの機  
能が単一の政党によって、あるいはアフリカ、アジア方式で充足されるか  
もしれない。だが、それにしても、これまでの体験を見すこしてしま  
うと、今世紀の政治上の課題を誤認してしまうであろう。政治体制はいち  
るしく集団化の形態をとって構成されるが、産業社会の時代では同一のタ  
イプの集団形態でも、現実にはそれぞれ特殊な様相をとる。

西欧の社会学者たちはトックヴィルの想定より、コント、マルクスより  
多くのものを負っているとはいえない。つまり、近代社会は不可避免的に産  
業的、商業的、民主的である。しかし、それはその実、自由であったり、  
独裁的であったりする。産業社会のそれぞれの特徴はどのような政治体制  
を選択するかによって規定されている。<sup>(30)</sup>

#### (四) むすびにかえて

ミルズは民主主義社会では、経済、政治、軍事の領域において巨大  
な組織化が進行しているとして次のように診断する。これによって権  
力は三つの組織の頂点に集中し、そこに位置する少数のパワーのエリ  
ートが広い範囲にわたって分布しているマス・メディアで展開されて  
いるサブ・エリートの活動を通して埋没している無防備な大衆を操作  
し、巨大な権力を一方的に行使するという大なる脅威の可能性があ  
るという。

アロンもこのような事態を冷静に分析するとともに前向きな政治姿  
勢をもつ。現代社会の複雑な機能分化と流動化は社会のあらゆる場  
面で能力と業績による多くのエリートを輩出している。だが、ここでア  
ロンはエリート理論と代議制を中心とする民主主義制との和解を試み  
る。エリートの世代が民主制の運営の規準に応じて積極的な役割を果

すようにエリート間の自由競争が行われ、他方において、新聞、T・  
Vの公開討論など多くのメディアを媒介して啓蒙された一般世論が積  
極的な発言するという徴候が認められる。つまり、彼は多様なエリー  
トの自由な競争と大衆の彼らへの支持による影響の行使に自由な多元  
的民主主義を見出そうとする。

アロンの政治への考察は五〇年にわたって続けられたが、そこでの  
基調は政治から夢やポエジーをようしゃなく剝奪することに向けられ  
た。彼の自由主義はひたすら政治を散文的に書くことしかなかった。  
ましてや社会学者としては、政治に対してひとびとを感性の高揚より  
も洞察に、美よりも正確さにみちびくという宿命をもつ。そして、ア  
ロンの自由主義は生涯をかけて、相手のイデオロギーの虚妄をその都  
度、洗いだしていくというたゆまざる実践にあり、そこには一つの新  
しいイデオロギーの再構築ではなくて、真実の自由への懐疑的な追求  
が認められるだけである。

「私は失望に屈したくはない。ある者たちは本質的に恣意的であ  
り、暴力的な権力の隠蔽しかみようとしないといえ、私  
がずっと擁護してきた体制はたしかにもろく、騒々しい体制である。  
だが、この体制が自由であるかぎり、思いもかけない可能性を保ち続  
けるであろう。」<sup>(31)</sup>

#### 参考・引用文献

- (1) Henry Kissinger, Préface de Memoire, Holmes & Meier,  
1990 pp.9—11
- (2) 西永良成、自由主義者の孤独、中央公論、一九八四年一月号65頁
- (3) R. Boudon, L'Année Sociologique, 1983, 3, 3, P. U. F pp.3—6
- (4) G. Busino, Raymond Aron et la Sociologie, L'Année Socio-  
logique, 1986, 36, P. U. F pp.291—315
- (5) R. Aron, Les Sciences Sociales en France, Hartman, 1987
- (6) R. Aron, La Sociologie Allemande de Contemporaine, P. U.  
F, 秋元・河原・芳伸訳 現代ドイツ社会学、理想社、一九五年 ヴェー



ペーの遺 川上 福村出版

- (7) E. Shils, Raymond Aron, 1905—1983, A Memoir, in edited by F. Drans, History, Truth, Liverty, The University of Chicago Press, p.16
- (8) 前掲書『La Sociologie Allemande... pp.20—22
- (9) Simone de Beauvoir, La Force de L' Age, Gallimord 女のちるの女の回想 朝吹・二宮訳 紀伊国屋一九八八年 二六—二七頁
- (10) 宮島壽 現代ノヒンズと社会学 木鐸社 一九七九年 三九—四四頁
- (11) R. Aron, L'Age des Empires et L'Avenir de la France, Hartman, 1945
- (12) R. Aron, Social Structure and Ruling the Class, The British Journal of Sociology, vol. 1, March 1950 pp.50—6
- (13) R. Aron, Main Currents in Sociological Thought, Basic Books, 1965 社会学的思考の流れ 北川・草野訳 法政大学出版 ノルボンヌの講義録 Les Grandes Doctrines de L'Histoire Sociologique を素直にこのころの若干の改訂をいへ Les Etapes de la Pensée Sociologique, Gallimard, 1967 ち出版ち出版
- (14) R. Aron, Mémoires, 50 ans de Réflexion Politique, Editions Julliard, 1983 部分訳 西永良成 自由主義者一九八四年一月 六四頁
- (15) R. Aron, Dix-Huit Leçons sur La Société Industrielle, Editions Gallimard, 1962, pp.11—20
- (16) S. Eisenstadt, Introduction: The Sociological Vision of Raymond Aron, in Rymond Aron, Power, Modernity and Sociology, Edward Elgar, 1988, pp.1—9
- (17) R. Aron, Progress and Disillusion, The Dialectics of Modern Society, Paul Mall, 1968
- (18) R. Aron, L'Opium des Intellectuels, 1955  
The Opium of the Intellectuals, Doubleday & Company Inc., 1957 渡辺訳 現代の知識人 論争社 一九五九年 七頁
- (19) R. Aron, Plaidoyer pour L'Europe Decadente, R. Lafont,

1968

- (20) R. Aron, Mémoires, Editions Julliard, 1983  
部分訳 西永良成 自由主義者ノヒンズの証言『前掲の(2)五五頁
- (21) 前掲書 現代の知識人 三七八頁
- (22) 寿里茂 現代フランスの社会構造 東京大学出版 一九八四年 二二〇—二二二頁
- (23) D. Bell, The Coming of Post-Industrial Society, Basic Book, 1973 内田その他訳 脱工業社会の到来 タイム・エディ社 一九七五年 二〇—二五頁
- (24) 前掲書 Dix-Huit Leçons... p.120
- (25) R. Aron, The Industrial Society, New York, 1967 pp.105—130
- (26) 前掲書 脱工業社会の到来 一五〇頁
- (27) 前掲書 現代の知識人 一五二頁
- (28) 前掲書 現代の知識人 一八二頁
- (29) R. Aron, On the Proper Use of Ideologies, in J. Ben-David and T. N. Clark(eds), Culture and Its Creator, University of Chicago Press, 1977, pp.1—15
- (30) R. Aron, Les Sociologues et Les Institution Representative, Archives Européenne de Sociologie, Vol1, 1960, pp. 191—193
- (31) 前掲書 Mémoires 三三四頁